

組織的な若手研究者等海外派遣プログラム（短期派遣 EUROPA）

報告書

東京外国語大学大学院博士後期課程

菅井健太

ブルガリア及びルーマニア派遣の報告書

期間：4月18日～5月14日

報告者：菅井健太

1. 滞在中の経過報告

4月18日～5月14日にかけてのおよそ一か月間、ブルガリアのソフィアとルーマニアのブカレストに滞在して、研究発表及び調査活動を行った。以下にその活動の詳細を時系列的に述べる。

4月18日～4月30日にかけては、ブルガリアの首都ソフィアに滞在した。そのうち前半の19日から21日の間はスラヴ学学会の第11回大会がソフィア大学の主催で開催されており、その学会へ参加した。残りの後半の一週間は国立図書館に通ったり、ブルガリア科学アカデミーの研究者との面会などを行ったりした。ソフィア滞在中の滞在先のホテルは、大会の実行委員会が予約したホテル「ドム・ナ・ウーチェニエ」であった。このホテルは、ブルガリア科学アカデミーの敷地内にあるホテルであり、国内外の研究者の滞在中に利用されるようである。大会終了後も個人的に延泊して、4月30日まで同ホテルに滞在した。



写真1¹：基調講演の様子



写真2：研究発表の様子 (ティシヴァ准教授)

大会初日の19日には、午前中にブルガリア国内外の5人の研究者による基調講演が行われており、それに出席した。午後には、自分自身の研究発表がプログラムに組み込まれていたが、それは無事に終えることができた。想像していた以上に会場からの反応がよく、多くの研究者から質問やアドバイスを頂いた。その中には、ブルガリア語学を専門としているソフィア大学のクラシミラ・アレクソヴァ准教授もおおり、発表終了後に直接貴重なアドバイスを頂くことができた。アレクソヴァ准教授は、独自に収集したブルガリア語の口語コーパスをインターネット上で公開しており、ブルガリア語の口語の研究に際しては、

¹ 報告書中の写真はいずれも菅井が撮影した。日付が入っているが、いずれも日本時間であり、現地時間はそれから6時間引いたものである。

頻繁に引用される資料となっている。また、アレクソヴァ准教授を通じて、ヨフカ・ティシェヴァ准教授との面会もかなった。ティシェヴァ准教授もまた著名なブルガリア語学者であるが、この面会が私にとってとりわけ大きな意味を持ったのは、准教授が私の研究しているテーマと非常に近いことを研究なさっているためである。私自身も准教授の研究を多く引用しており、直接お会いしてお話を伺うことができ、またコンタクトを打ち立てることができたのは大きな成果であった。

初日の夜には歓迎パーティが開催され、それに参加した。会場では、多くの大学の教員や研究者と知り合うことができた一方で、若手のソフィア大学の大学院生とも交流することができた。若い世代の彼らともつながりができたことも大きな成果と考えることができるであろう。

翌日以降は、プログラムの中で言語学関係のセッションの発表を中心に聴講した。前述のティシェヴァ准教授やアレクソヴァ准教授の研究発表以外にも、ナデジュダ・コストヴァ助教（ブルガリア科学アカデミー）、ペーチャ・オセノヴァ准教授（ソフィア大学）、アルベナ・スタメノヴァ准教授（ソフィア大学）、イヴァン・ペトロフ氏（ソフィア大学大学院）などの研究発表も聴講し、大変興味深かった。



写真 3：歓迎パーティの様子



写真 4：右手の建物がブルガリア語学研究所、正面奥がホテル

4月23日（月）は、ブルガリア科学アカデミー附属ブルガリア語学研究所内の方言学セッションを訪問し、研究者と面会を行った。当日のお昼に方言学セッションの研究室に通され、スラフカ・ケレミチェヴァ准教授を中心に、リリャナ・ヴァシレヴァ准教授、キリル・パルヴァノフ助教などの研究者と面会することができた。彼らは、私の研究テーマについて興味を持ってくださり、ブルガリア語方言学の専門の立場から、研究手法やフィールドワークの際の具体的なアドバイスをくださった。特にリリャナ・ヴァシレヴァ准教授とは、4月26日（木）に再度同じ場所で面会をすることができ、フィールドワークに関して具体的な相談にのっていただき、ご自身の経験も踏まえた実際的なアドバイスも頂くことができた。さらに、研究テーマについての議論にも熱心に付き合っていた。また、この際にブルガリア語学研究所内の、方言データの資料室にも通していただき、研

究に用いられている方言資料のカードを目の当たりにすることもできた。同セクションの研究者全員からそれぞれ方言地図資料や研究本など、今後の研究に役立つ資料をプレゼントしていただいた。

4月24日(火)は、ブルガリア科学アカデミーの研究者で、ルーマニア語の専門家であるステファナ・カルディエヴァ教授と面会した。すでに引退なさって、ご自宅で静養中とのことなので、ブルガリア語学研究所のナデジュダ・コストヴァ助教に連れられて、ソフィア郊外のご自宅に伺った。ちなみに、ブルガリア科学アカデミーの関係者との面会は、すべてナデジュダ・コストヴァ助教の尽力により実現したことを付け加えておく。カルディエヴァ教授は、ブルガリア語のみならずルーマニア語のご専門でもあるので、その立場から、私の研究テーマについて具体的なアドバイスをしていただくと同時に、議論にもお付き合いいただいた。また、関係する文献で、私が持ち合わせていないものをコピーして下さったり、ご自身が編著を担当されたルーマニア語とブルガリア語の対照辞典もプレゼントして下さったりもした。それに加え、カルディエヴァ教授は、ルーマニアのブカレスト大学でも長く教鞭をとってらっしゃったのであるが、私がブルガリア滞在の後にルーマニアでフィールドワークをすることを聞いて、ブルガリア系ルーマニア人の教え子で、ブルガリア語を話す村として先行研究でもよく知られるバレニ・スルビ村のご出身であるドゥミトラ・ブレイ氏もご紹介いただくなど、ルーマニア滞在中の調査のためにもご尽力くださった。



写真5：国立図書館



写真6：ブルガリア語学研究所入口

4月25日(水)、26日(木)、27日(金)は、ソフィア大学のそばに位置する国立図書館で資料収集に従事した。ほとんどの雑誌や研究本は閉架式であり、コピーも自分ではできないので、作業には時間がかかったが、今後の研究に有益な資料をたくさん集めることができた。ここではすべて挙げることはせず、主要なものを一部記載する。ズラトカ・ユフの『ルーマニアのキャジュナ及びヴァリャ・ドラグルイ村におけるブルガリア語民謡』は、ルーマニアのブルガリア人村の民謡を分析した優れた研究書であるばかりでなく、全体の半分は筆者が収集した民謡を文字化した莫大な量の言語資料であり、今後の研究に極めて有益なものである。ヴァリャ・ドラグルイ村は後述のように、私も実際に訪問しフィ

ールドワークを行っているので、筆者が収集した時代との比較のためにも有用な資料であるといえる。それに加え、キリル・ディムチェフによる『ルーマニア人民共和国ヴァリャ・ドラグルイ村のブルガリア人の方言、音声体系』や『ヴァリャ・ドラグルイ村（ルーマニア）からの言語資料』も挙げることができよう。前者は、論集所収の論文でありながら100ページを超える大著であり、綿密な音声体系の研究に加え、実際の言語資料も付せられている。後者も、筆者によって収集され、研究のために論集に公開された文字化された言語資料である。

4月28日（土）は国立図書館が休館であるため、町の新刊本屋及び古本屋を訪ね歩いて、補足的な資料収集を行った。29日（日）は、翌日のルーマニアへの移動に備えて、休日とし、荷物の整理とルーマニア滞在中の調査計画などにあてた。

4月30日（月）は、朝の9時ソフィア発の列車に乗り、ブカレストへ向けて移動を開始した。直通電車であるが、ブカレスト北駅に到着したのは、国境での一時間の遅延もあり、同日のおよそ20時であった。その日はホテルに直行し、翌日からの日程に備えた。

5月1日（火）は、町の新刊本屋及び古本屋を訪ね歩いて、資料収集を行った。翌日の5月2日（水）には、ブカレスト大学の外国語・外国文学学部を訪問し、日本語学科のフラヴィウス・フロレア教授と面会した。その後、同学部のブルガリア語学科を訪問し、言語学が専門のマリアナ・マンジュリャ准教授をご紹介いただいたが、出張中であったため改めて別の機会にお会いすることになった。そして、ブカレスト滞在中の調査にご協力いただくことになったブカレスト大学日本語学科の学生であるアンドレア・フランク氏と滞在中の調査計画についての話し合いをした。



写真6：ブルネシュティ村役場



写真7：ブルネシュティ村のインフォーマント
(ヨルダン爺さん)

5月3日（木）は、ブカレスト郊外にある、イルフォヴ県のブルネシュティ村に調査に出かけた。村役場では、インフォーマントを探すうえでの現地協力者としてストイチュ・フロレンティン博士をご紹介いただき、彼と面会した。博士に会うまでかなりの時間がかかってしまったので、その日は3人のインフォーマントとの短いインタビューで終わってしまった。翌日に来て話を聞くための約束をまた別のインフォーマントの家で取り付け、

その日の調査は終了した。合計しておよそ1時間半分の音声データを得た。フロレンティン博士は、現代標準ブルガリア語を勉強することで習得しており、当地の方言的な語彙などを標準ブルガリア語で直して教えてくれるなど、言語面でも助けていただいた。

5月4日（金）には、再びブルネシュティ村に調査に出かけた。二人のインフォーマントから約4時間半分の音声データを収集することができた。話好きのヨルダン爺さんは、およそ3時間半にわたってノンストップでお話をしていただいた。



写真8：ブカレスト首都図書館

5月5日（土）は、ブカレスト中心地にあるブカレスト首都図書館を訪れ、資料収集に従事した。学術文献は全体的にあまり多くないが、ロマノスラヴィカのような学術雑誌は一通りそろっていた。翌日の5月6日（日）は町の古本屋巡りをした以外は休息にあてた。

5月7日（月）は、やはりブカレスト中心部の革命広場に面した大学中央図書館を訪れ、資料収集を行った。こちらの図書館は学術文献も豊富に揃えており、多くの資料を集めることができた。ここも大半の本は閉架式であったが、ソフィアの国立図書館とは異なり、自分で自由にコピーできるのは便利であった。ただし、専用のコピーカードでしかコピーができず、コピーカードが売り切れてしまうとそれまでなので、その点はお金を払いさえすればコピーしてくれるソフィアの図書館と異なり不便である。

ここでも収集した資料のうちいくつかを挙げておく。ブルネシュティ村におけるブルガリア語方言の、とりわけ音声についての研究で知られるゲオルゲ・ボロカン教授による『ブルネシュティ村のブルガリア語方言、母音組織』、『ブルネシュティ（イルフォヴ県）のブルガリア人の方言、子音組織』などは、私自身が調査した村の方言の音声的な研究の基本的な文献である。また、ブカレストで開催された言語学やスラヴ学の国際大会の論集などに所収された関係ある論文もいくつか収集できた。

5月8日（火）は、ジュルジュウ県にあるヴァリャ・ドラグレイ村に調査に出かけた。村役場で、やはり標準ブルガリア語に通じた協力者を紹介され、その方の助けを借りて、



写真9：大学中央図書館

極めてスムーズに多くのインフォーマントと接触することができた。その数は7人で、収集できた音声資料は4時間程度である。



写真10：ヴァリャ・ドラグルイ村役場 写真11：ヴァリャ・ドラグルイ村のインフォーマン一家と

5月9日（水）は、まず午前中から夕方にかけて、再びブルネシュティ村を訪問した。やはり協力者のフロレンティン博士の力を借りて、さらに3人のインフォーマントに会うことができた。そのうちの一人のヴァシラ婆さんは、今までのインフォーマントの中で唯一ブルガリア語での民謡を記憶していて、それを披露してもらうこともできた。合計で、4時間半の音声資料を集めることができた。ブカレスト市内に戻ると、夕方にブカレスト大学のブルガリア語学科准教授マリアナ・マンジュリャ氏との面会を行った。多忙の中、一時間ほど時間を割いてくださって、研究テーマについての議論を行ったり、いくつかの有益と考えられる文献の貸与もして下さった。その後、夜の閉館まで再び大学中央図書館にて文献収集活動を行った。

5月10日（木）は、ブルガリア科学アカデミーのカルディエヴァ教授の元教え子で、ドゥンボヴィツァ県のトゥルゴヴィシュテ在住のドゥミトラ・ブレイ氏に会い、彼女の田舎でブルガリア人集落として知られるバレニ・スルビ村を訪れるために、ブカレストを朝に出発して、トゥルゴヴィシュテに向かった。トゥルゴヴィシュテまではおおよそマイクロバスで2時間ほどで到着し、ホテルに荷物を預けてすぐに、さらに車で30分ほどかけてバレニ・スルビ村に向かった。まずは同氏の生家を訪れ、お母様を紹介していただいた。ブレイ氏自身は、大学で学び標準ブルガリア語を知っていたが、普段はトゥルゴヴィシュテに住んでいて、御主人がルーマニア人であることもあり、当地の方言はかなり忘れてしまっていた。それに対して、お母様は当然のことながら、当地の方言をよく保持している。何よりこの村で特筆すべきは、次の点である。ブルネシュティ村及びヴァリャ・ドラグルイ村では、ブルガリア語の方言を保持しているのは年齢が60代以上の世代に限られており、その世代の子供の世代は、理解はできるが積極的に話すことはできず、またさらにその下の孫の世代は理解すらできず、解するのはルーマニア語のみという、いわばモノリンガルの状況にあった。それに対して、バレニ・スルビ村では、子供の世代までもブルガリア語の方言をよく保持しており、ルーマニア語とのバイリンガルの状況が保たれて

いたのである。したがって、高年齢の世代だけでなく、中年世代から子供の世代まで多くのインフォーマントの音声資料を収集することができた。



写真12：ブルネティ村のインフォーマント
(ヴァシラ婆さんとお孫さん)



写真13：キル文字によるルーマニア語の
古文書(トゥルゴヴィシュテにて)

翌日の5月11日(金)は、午前中はトゥルゴヴィシュテの古文書の博物館を訪問し、キル文字で書かれた古いルーマニア語文献や、ルーマニア教会スラヴ語文献などを目の当たりにすることができた。午後には、再びバレニ・スルビ村へと出かけ、ブレイ氏の親戚にあたる一家を訪問した。三世代揃った大家族で、息子夫婦が3組いた。また、お嫁さんの親戚の家に連れて行っていただいたりもしたおかげで、様々な世代、性別のインフォーマントと話すことができた。

二日間にわたってこの村で行った調査では、ブレイ氏のコーディネートの献身的な協力のおかげで、合計9時間近くも音声資料を収集することができた。



写真14：バレニ・スルビ村の様子と
小学生のインフォーマント



写真15：バレニ・スルビ村のインフォーマントの
お婆ちゃんたちに囲まれて

5月12日(土)は、トゥルゴヴィシュテを出て、ブカレストに戻った。午後からは、再び大学中央図書館に出向き、予定していた資料の収集作業を夕方までに終えた。翌朝に

帰国の途につくことになるので、その後は荷造りなどをしたのみである。

5月13日（日）の朝にブカレストを出発し、モスクワ経由で翌14日（月）に帰国した。

2. まとめと今後の展望

今回のブルガリア及びルーマニアでの滞在では、多くの研究者やインフォーマントとのコンタクトを開拓することに成功した。またそれと同時に、ソフィア及びブカレストの図書館での作業を通じて、多くの文献資料の収集も行うことができた。ブルガリア人コミュニティにおいては、合計22時間にも及ぶ生の音声資料を集めることもできた。いずれも今後の研究、とりわけ博士論文の執筆にとって貴重な研究資料となるものである。

今回の滞在を通して、村での協力者やインフォーマントとのコンタクトが確立され、さらには信頼関係も多かれ少なかれ築くことができた。今後とも、現地のインフォーマントや協力者、及び研究者との連絡をなるべく密に行うことで、今回構築した人間関係を維持し、今後のフィールドワークなどの調査活動、研究活動のために役立てていきたい。

以上のことを踏まえると、今回の短期派遣による両国の滞在は、予定した以上の成果があったと言えることができる。

今後は、収集した音声資料の整理をしながら、今現在注目している目的語のクリティック・ダブリングや前置詞 *pă* の用法などの諸現象の例を中心に抽出し文字化して、統語論的側面及び語用論的側面からより詳細な分析を加えることを目指す。今秋（10月末）にソフィアで開かれる社会言語学関係の大きな大会に参加して、今回収集し分析を行った言語資料を元に、ルーマニアのブルガリア方言におけるクリティック・ダブリングをテーマに、研究発表することを計画している（申し込み済み）。

また、今回は3つの村で22時間近い音声資料を収集することができたが、上述の現象の用例は全体的な様相を把握するにはまだ不十分である。また、今回は自然会話や調査者である私とのインタビュー形式の会話を中心であったが、インフォーマントに対するアンケート調査を行うことを通してより細かい点（自然会話などではなかなか出てこないような文脈や表現、文法事項など）について調査することが望まれる。したがって、今後も再び調査地に出向いて、調査活動を行う必要がある。その際には、今後の分析を踏まえたうえでのより具体的な調査を行うことになる。